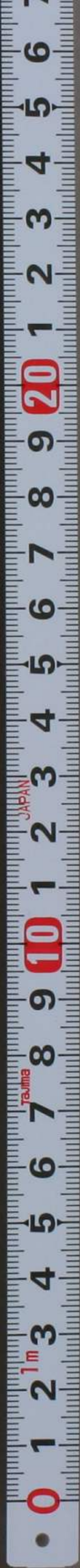




詞乃禁本

全

ホ 2  
631





加2  
691  
卷

愚川其親口述  
鈴木弘恭編輯

# 詞乃琴亦聴 全

明治廿二年四月発兌

十八公舎

## 詞の琴亦聴序

今乃世に秋よむ人々少くとも重んずる書讀む人の長坂よまを  
名留るべき法をたねる人のあつた。然とて人の新しき法  
知る人も古きと温厚の心れもなきは、のちのちのあつた  
うに、その秋よむる法をたねるひよ、そのあつたか、そのあ  
ふに、そのあつたひよ、そのあつたひよ、そのあつたひよ、そのあ  
古きと温厚の心れもなきは、のちのちのあつたか、そのあ  
く、そのあつたひよ、そのあつたひよ、そのあつたひよ、そのあ  
く、そのあつたひよ、そのあつたひよ、そのあつたひよ、そのあ  
星川其親其人よ、そのあつたひよ、そのあつたひよ、そのあつたひよ、そのあ





言葉のやまじふとつゝこれれを沖國のまのまゝに  
せしよりまゝなるたしと紫のこゝろとゆるくはよるはと  
ゆゑははままたなほ一一人のなほ初學まじのゝめに  
詞の禁といふ書とまじあはれりたれりたれらハ詞の八儻  
とてふとは紐鏡とをつつよとつうひまゝ、辞のまの緒  
よいやうとくまゝと考へ合をく十四種のまゝに受  
てまゝは指辭の御事十無くは一月よとつゝ一  
とつうやまゝのものせられたるのまゝあらひのまゝのま  
まのまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
ふれまゝのまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
紙よまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
のまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
くまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
こひまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
よまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
そまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
の書まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
いゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ















- 一 自他六等の事
- 一 辞小五階ある事
- 一 一階の辞の俗解
- 一 二階の辞の俗解
- 一 三階の辞の俗解
- 一 四階の辞乃俗解
- 一 并ニどにさくすらの事
- 一 五階の辞乃俗解
- 一 指辞小五條ある事
- 一 むもの徒の指辞の事

- 一 がのれ指辞の事
- 一 ぞやのれ指辞の事
- 一 何の重れ指辞の事
- 一 こそれ指辞の事
- 一 お何の軽の指辞の事
- 一 おの重れ指辞の事
- 一 徒れ重れ指辞の事
- 一 希求使令小係るも徒の事
- 一 變格といふ事
- 一 敬語添言の事





ワ 一	ヤ 一	マ 一	ハ 一	ナ 一	カ 一	ラ 四	マ 四	ハ 四	タ 四	サ 四	カ 四	階 四	十 種 の 活 用 將 然 言 連 用 言 終 止 言 連 躰 言 已 然 言 詞 の 彙 ことのはれらちりけりしよふ人もあらば しよふせしとありのあをりぞ 黒川真頼
段 一					段 四						段 四		
居	射	見	干	似	着	釣	住	思	打	押	飽	如	
ゐ	ゆ	み	ひ	よ	き	ら	ま	も	た	さ	か	一 の 音 一 階 の 辞	
む	あ	む	む	む	む	む	な	む	む	む	む	二 の 音 一 階 の 辞	
ゐ	ゆ	み	ひ	よ	き	り	み	ひ	ち	し	き	二 の 音 二 階 の 辞	
そ	し	な	け	つ	て	そ	し	な	け	つ	て	三 の 音 二 階 の 辞	
		む	げ	ら	む			む				三 の 音 三 階 の 辞	
ハ	ガ	ナ	メ	ベ	ラ	ハ	ガ	ナ	メ	ベ	ラ	四 の 音 三 階 の 辞	
タ	ヤ	ナ	リ	ー	ム	タ	ガ	ナ	メ	ベ	ラ	四 の 音 四 階 の 辞	
	カ	モ	ナ	ヤ	ヨ		カ	モ	ナ	ヤ	ヨ	四 の 音 四 階 の 辞	
ゐ	ゆ	み	ひ	よ	き	る	む	ふ	つ	す	く	四 の 音 四 階 の 辞	
ん	が	な	と	を	な	は	が	な	と	を	な	五 の 音 四 階 の 辞	
	や	り				は	が	な	と	を	な	五 の 音 五 階 の 辞	
れ	め	へ	て	せ	け	れ	め	へ	て	せ	け	五 の 音 五 階 の 辞	
						ど	も	ど	も	ど	も	五 の 音 五 階 の 辞	
						カ	シ	ナ	ヤ	ヨ	ト	五 の 音 五 階 の 辞	

○目三

以上二十五條

一 詞の活用の彙  
 一 終止言の彙  
 一 連用言の彙  
 一 連躰言の彙  
 一 已然言の彙







ク シキ	シ シク	ク シキ
格一き   く	き志   く志	き   く
善ヨ	悲ヲ	戀ニ
④	④	④
むむ		
とと   てを	とと   てを	とと   てを
④	④	④
父カシモナヤとと	父カシモナヤとと	父カシモナヤとと
④	④	④
をな   小	をな   小	をな   小
をな   小	をな   小	をな   小
④	④	④
むと   小	むと   小	むと   小
④	④	④
ども   ども	ども   ども	ども   ども

○目五

三 一	三 一	三 一
格一 の音 のニ シキ クシキ	格一 の音 の五 押有 四段	格一段 四行良
悲有	戀有	深有
④	④	④
むむむ	むむむ	むむむ
④	④	④
むむむ	むむむ	むむむ
④	④	④
むむむ	むむむ	むむむ
④	④	④
ハカシヤと	ハカシヤと	ハカシヤと
④	④	④
むむむ	むむむ	むむむ
④	④	④
むむむ	むむむ	むむむ
④	④	④
カシ	カシ	カシ



詞乃栞打聴

黒川真頼 口述  
 鈴木弘恭 編輯

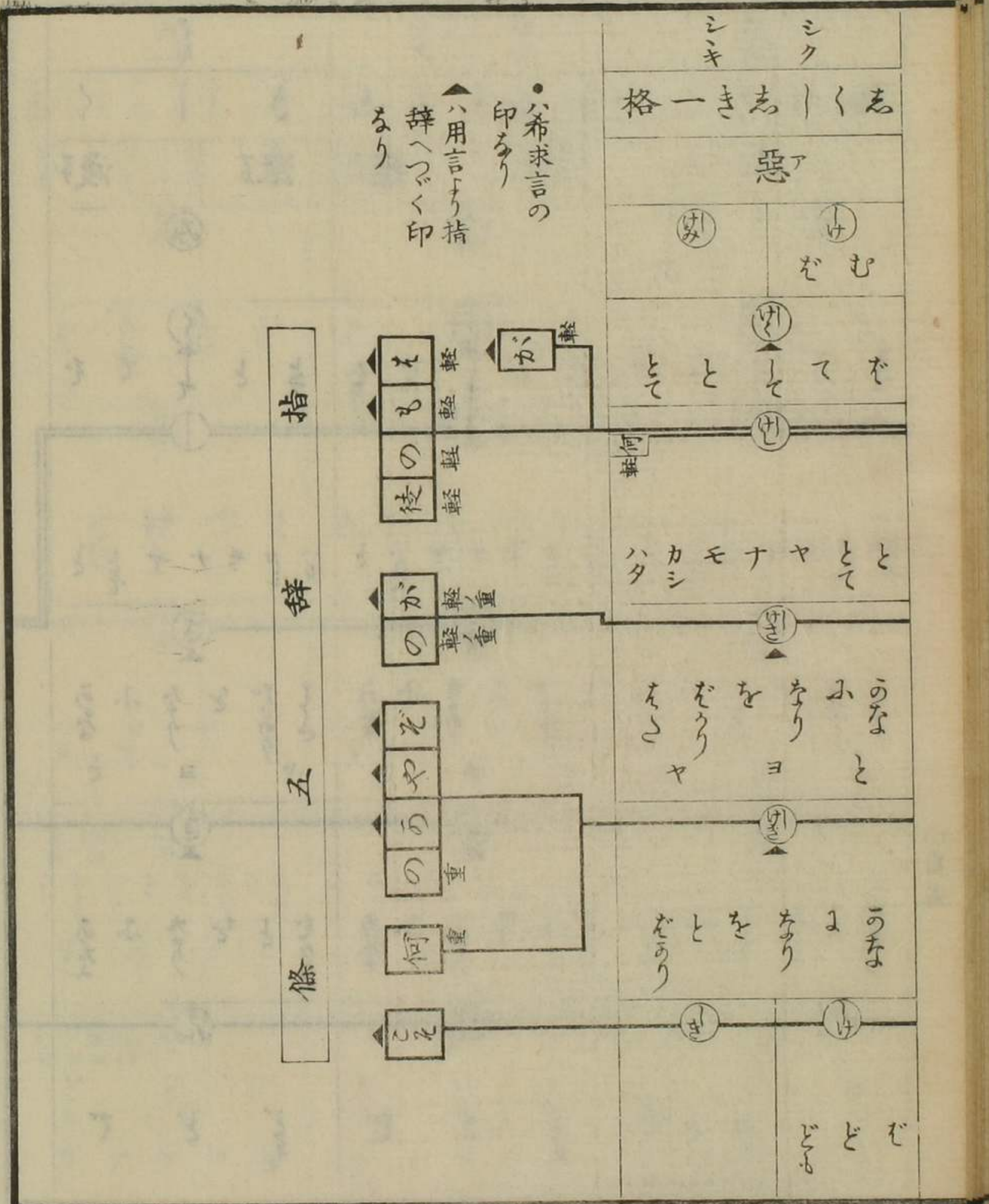
○詞の栞と名づけし事

これを詞乃栞と名づけし事、別ふふあき意れあるよはあらばおのれおこのふえ銭かきをくそやをる歌ふ

あとのをれみちとけまごふ人をもあらば

ふせふと一はる志をうぞ

おまつる少と一日しうい心えらるることならむ  
 さつ志をうとひふらと山深く日け入るよふ木の枝を折





うけそ、道の志るべとほることふて、一度志残りをしておけ  
ば、いつもその志をり、我目的あして、かけ入らる、なれば、そ  
れふあはらへて、かくハ名づけたるなを、なもく、いふ、への  
書をたどりて、のまあびせむよハ、詞のまあびを、のと、  
さて、ちろびのふをよみとく、なきなり、さるを、初學の輩、を  
急ふの、の意を用ゐて、解き、づに、あり、のあ、よなやめ、  
ハ、此の道より、はけいらぬゆゑ、のか、の學びふ心、む人  
と、まづ、のちより、はき入らば、いあふ志、げき文の林なり  
と、えたハ、やま、くは、けいら、るもの、のぞ、よざれば、そのおほむ  
福をつぎ、ふさと、のべ、

因ふ云ふ、詞ツイデふ於て一の音二の音といふハ、五十音の一  
の順序と異あり、五十音のうち第五の音ハ、詞の活用ふハ  
入らぬ音なれば、加行變格ハ是を省きて、例外なり残りの四段を詞  
の活用の段階とハ、はるあり、故ふ四段活用とハ、悉く四段  
ふ活用するものをいひ、一段活用とハ、第二の音の一段の  
こもて活用するものをいひ、中二段活用とハ、上下の二段  
即ち一の音を省きて中の二段、即ち二の音よて活用するもの  
音四の音、音三の音をいひ、下二段活用とハ、上の二段、即ち一の音を省き、下の二  
段、即ち三の音よて活用するものをいふなり、次の圖を見て  
知るべし、











○將然連用終止連體已然言の事

并希求使令の事

將然言連用言終止言連體言已然言と第一の音より第五の音まで区別あるゆゑハ、第一の音の將然言ハ、去るらむとする詞あり故ハ、むの辞をそへてろみまじし飽あむ押さむ打たむ思もむ住まむ釣らむなどいふが如しこれ將然言と名づくるゆゑなり、此の事ハ、やく詞の通路もいなり  
次ハ連用言ハ、用言より用言不續くをいふ、さて連用言ハ、いふあるを例とて、いふなきと死ハ、かりよ添て見るべし、必ハ省きよるゆゑ、いふぞ、いふとハ、咲きあるハ、咲きてあるとい

ふことあり、行きてをぐハ、行きてをぐといふことなり、咲きて行きてハ、用言より過ることあり、あるをぐハ、用言より今のことあり、がやうハ、連ねて用ゐるが故ハ、連用言といふあり、次ハ終止言ハ、いひはる、止む詞なり、先達ハ、截断言といへり、是ハ、若狭の義門が名付しなり、然れども允當ならぬ、其のゆゑハ、天地の間のもの皆始終あり、これハ、強て截する非む、し、自然ハ、まき、意なり、たとへハ、縲溜ある糸をまらむ、いふまき終りて止むが如し、故ハ、今終止と改めし、山海經よ、いふ書の終りハ、終止とあり、終止の字これハ、まきをさされハ、終止言といハ、自の詞のいひ終りたる後ハ、いふ名目なり、この詞も



もの徒の結ひ詞となる、徒とい指しつる辞無きをいふあれ  
ばきハめそ軽き格あり、その極免て軽き徒をもこの詞よて  
結べばもの此軽きこともす、推して知るべし、むれハち  
これ系の巻き終りて止むお如くあり、故に終止言といふな  
り、

次に連體言ハ、用言より體言へ續く詞なり、おれどもぞや  
の何よりか、れむ切る、格あり、是ハ切れぬ詞あれど、ぞ  
やの何乃指辞不應じて切る、お故に、連體言の結びを甚  
力あり、右の如くぞやの何に應じれば切る、あれども、つ  
ねハ續くお詞の性質なり、さて此の詞ハつねハ體言に連り

續く性質なるお故に、是を連體言といふなり、

次に已然言ハ、已然然る意あり、おれども是も允當ならぬ、  
已然をどのいふハ心よくもなれども、相當の文字見當らね  
む、たゞものす、おそおきつたとへハ風ふけハといへむ、  
先刻あらふく風の今ふいよりて吹てあることあり、過去よ  
り現在まで吹てあるをいふなり、花さけハといへば、己よ咲  
つる花が今よ至りてある意あり、凡て已然言ハ、過去より現  
在までハ關係あり、ゆゑおれのあられるとあるとを  
兼ぬるものと定むるなり、

四段一段中二段ハとも五十五音の中六行づゝお活用し、下



二段のみハ十行ともハ活用するハ、皇國言語の自然なるべし、  
志のろを詞ハ衢ハ、日の字急をのゐを一段と中二段と兩方ハ入きて、中二段を七行の活きとせしハ誤あり、

又ハ衢ハ、一段のハを安行のいとて、初めよおきたるも、  
ろハ一段のハ也行のハあり、

又こゝハ一言ハべきことあり、希求使令ハ四段活用よて

ハ第五の音ハ屬されど、已然言ハあらば、希求使令とハ、いも、ゆる下知の詞よて、

四段よてハ、あけおせうておもへまめつれの類、一段、中二段、

下二段よてハ、著よ見よ起きよ落ちよ得よ受けよといへる類ハ希求使令ハ、いももの徒を受てむすぶが例なり、四段活用

ハ、第五の音ハ希求使令あり、一段、中二段、下二段、ハ第一の音

ハ希求使令あり、四段活用の五の音よていも、いももの徒を  
うけて切る、時ハ、希求使令よて已然言ハあらば、一段、中二  
段、下二段の一の音よていも、いももの徒をうけて切る、時  
ハ希求使令よて、將然言ハあらざるあり、古人云、一段、中二  
段、下二段ハ一の音ハ希求使令あるべし、あらば、一の音ハ元  
より詞をなまじ、調をざる言あり、故ハ二の音連用言に希求  
使令を付る方穩當なるべしと、これも一應ハ尤のやうなり、  
志うれども連用言をもて希求使令とてハ、其の理のなま  
じ、其の證ハ變格ハ於ては、必、一の音より希求使令を受る確  
證あり、そはいうあとならば、



加行變格

こよ

佐行變格

せよ

是らの如し、此の例を推して見れば、一の音より受るを以て至當とをべし、さう又四段ハ五の音一段以下ハ一の音ハ

.....の印を付けたるハ、希求使令を示したるあり、

又こよハ一言いふべきことあり、奈良朝以上ハ四段の五の

音ハよもどくくして希求使令となり、方一ひくま野小に

だりころも爾保波勢あびのあうに万三ハ一思ふとこ  
ころすむる風まちてよくして伊麻世あらきそのうち

奈良朝以下もまれハ、下二段の一の音よもどを添へば

して希求使令とせらるもあるなり、古今俳諧ふしのねのあ

神ぞふけさぬむるくありを堀川百首をやらどもをふ  
ねさよせののミゆる島根のをちを折らまくもほし

又意ハおなごして四段と中二段と二かこふ活く詞あり、こ

まハ四段の方古くして中二段の方新らし、その證ハ忍バむ

忍び忍ぶ忍べといふハ四段活用あり、中二段よてハ忍び忍

ぶ忍ぶる忍ぶれといふ、此の忍ぶるといふ活用ハ、奈良朝ハ

ハ聊も何ることある、又紅葉を四段よてもこたむもうちも

みづもこでと万葉よいへれど、ゆらむりみづると中二

段ハ活用したるハ、万葉よハ見返イナキヤウ平安京以来の歌より見

返り、是もまゝ心得おくべし、

○三變格并ニ良行四段一格の事

前ももいへるが如く、加行、佐行、奈行、ハ變格の活きありて、



これを三變格といふ、これハ四段も一段も中二段も  
下二段もその定格ハあらぬ活用あれバ、變格といふ  
なり、さて又詞ハ衢まハ、右三變格の之を載つるを、今新しんと  
良行四段一格といふものを三種多おほきたるハ、前まへもいへる  
如く、良行四段活用とハ異なるハ、ゆゑあり、いづれも詞の彙  
を見て、まきまふべし、

○形状言の事

形状言ハ、いいをゆゆりくりくししきき、ままくくししききの二種あり、即ちくく  
ききハ、淺あくく、深ふくく等の類、ままくくししききハ、戀こひひ、悲かなしし、等なの類、  
て、皆上かみハ體言あり、淺あハ、ああささ、深ふハ、ふふの戀こひひ、悲かなハ、かかゑゑの

體言たいげん、くくししきき、ままくくししききの活かの添そりりするあり、此の外も  
體言たいげんならざれば、形状言けいじやうげんハ、つつららぬぬものものと心得こころえべし、

前まへもいへる如く、これハ又一格といふものを二種加へた  
るハ、善よくく、善よしし、善よきき、善よけけききを、善よけけくく、善よけけしし、善よけけきき、善よけけ、と  
いひ、惡わるくく、惡わるしし、惡わるきき、惡わるけけききを、惡わるけけくく、惡わるけけしし、惡わるけけきき、惡わるけけ、と  
けけきき、惡わるしし、とといふ類なり、此の格ハ古言ハ多おほく、さて此の條の  
已然言いぜんげんのことハ、次の條つぎのいふべし、見合せて、ままととるべし、

○古格といひく古く用ゐる詞の事并ニままととひひややを

まき詞の事

古格といふハ、古事記、日本書紀、万葉集などに見えたる格ハ



て、平安京以後より、大あゝハ用おぬをいふなり、さそ古格ふ  
於てハ、已然言を受るを、或省けるあり、

五真野の浦のよどのつぎ橋心ゆもおもへや妹が夢みー見ゆる

五六湯の原ふなく何たづハ我が如く妹よこふれや時どうぞ鳴く

あゆへやハ、あゆへをやあり、  
こふれやハ、こふれバやなり、

又くきよりうつる良行四段一格の活用より、将然言のか  
らをつめくといへるが多し、

五五うまぐーあねろよかくりみかくだよも國の遠あがなぐめゆりせむ  
同いちほろのそひのまう原ねもころよ奥をれうひそまこーよとのバ

遠のバハ、とほのらバなり、  
よのバハ、よのらバなり、

又く志き一格志くー志き一格活用の已然言のけーけハけ  
れあけきをつめたるなり、その

五玉ぼこのうちのとほけバまぼらひもやもーもあこ云く

五五あをみーなるの大路をゆきよけど此の山道ハゆきあーけり

事記けーたてのくらけ山さうーけどもこのぼれさうーくもあらは

五七れあふころもそめまけけーけどもきてあはらなや人のあふき

とほけむハ、とほけれをあり、ゆきよけどハ、ゆきよけれ  
どなり、さうーけどハ、さうーけれどなり、ほーけどもハ、  
ほーけれども  
なり、此類多し、

又同一一格の已然言のきーきハけーけの轉せらるのよそ、  
連體言のきーきとハ異なる、



傳記のうもこそやいふもさきさゆどこをならん君のうもこそ  
至わこのそとおまをあらめておつものもいふこそこひすかき  
よまきハ、よけれなり、なまきハ、あ  
けきあり、この類をばあり、

又古事記、日本書紀などの歌ふ、あなきろのうもあふときろ  
のうもなどあるろ、いハ嶺呂、妹呂、麻呂、なごのろとおれ、詞  
あれど、嶺呂妹呂麻呂あはく、體言よ添りたるハ親愛の意  
を含めり、まごあふときろかあきろとやうふ、用言よ付き  
たふハ親愛の意ハなくて、まごく助辞なりと知るべし、  
反語のやこれを疑嘆のやといふ、ゆを切るふもいふもさあり、其の例ハ  
万三河風のさむき、初瀬をたげきつ、君があましくふ似る人もあへや

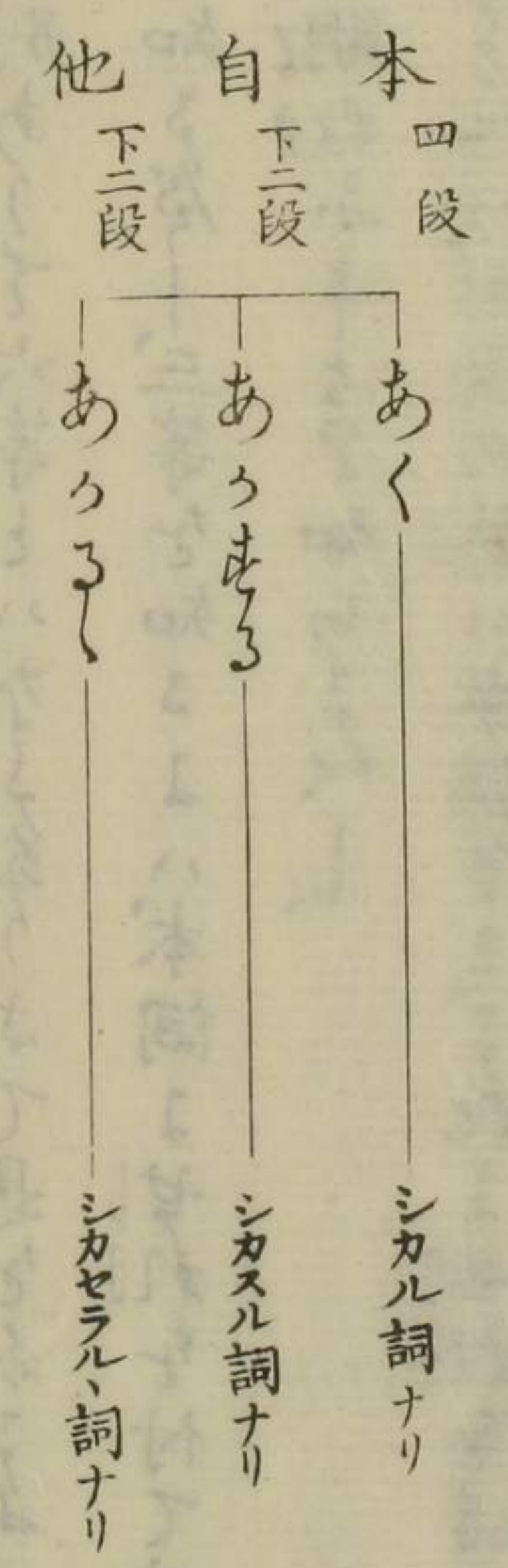
至あづさうを急の原野ふとかりきる君がゆづらの絶むとおのや  
至うふ原のねやいら小菅らまごあれ君はいら我忘るまや  
至たをさむ心あくいあやまごうのひをふひと目もあるごとあまや  
詩ハあへやハ、あはめやの約言、おもへやハ、おもまめやの約  
言、忘るまやハ、さすくらめやの約言、あれやハ、あらめや  
の約言  
なり、  
かやうなりハ皆ハめらめの約言よてめハむの轉ぜるあり、  
是らのやハ疑嘆のやよて俗言のカイといふふおれ、  
又咏嘆のやの中ふまごつきあり、其の例ハ  
万三ひのちへの一重もなごさむるころもあれやと云々  
万六玉藻のうからん此島ふたさうをる鶴もあれや家思いざらん



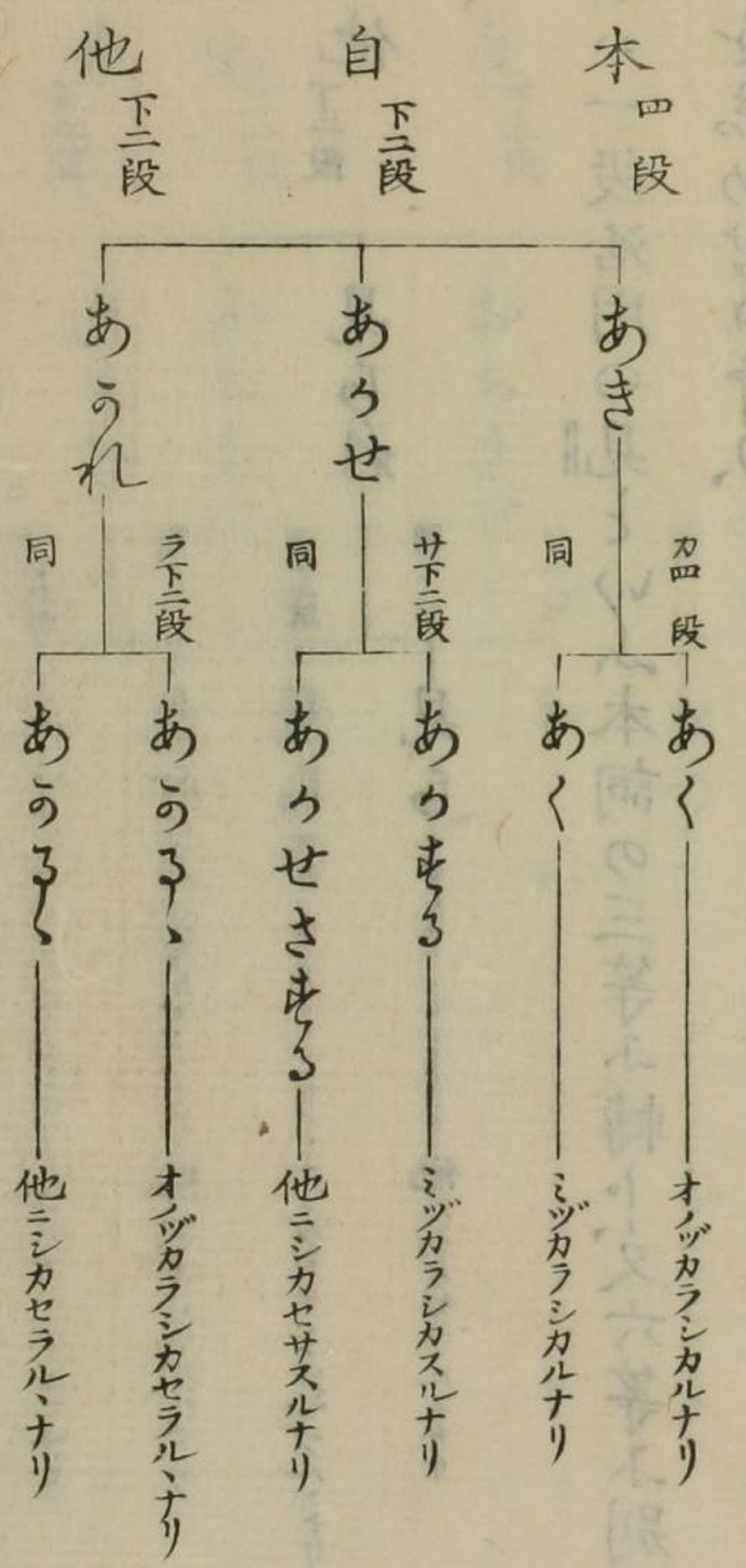




又例をいとも見させを見せ著させを著せといふ類なり、さて此三等より六等不別る、誤ハ、四段のあうむあきあくあけといふハ本なり、是を佐行下二段ふうつしてあうせあうあうまうあうまれといへば然る詞にて自なり、又是を良行下二段ふうつしてあうれあうるあうるあうるれといへむ、然せらる詞を他なり、今一二を掲げて左よ志免ん、



右ハ三等なり、是を六等不區別せれば左の如し、

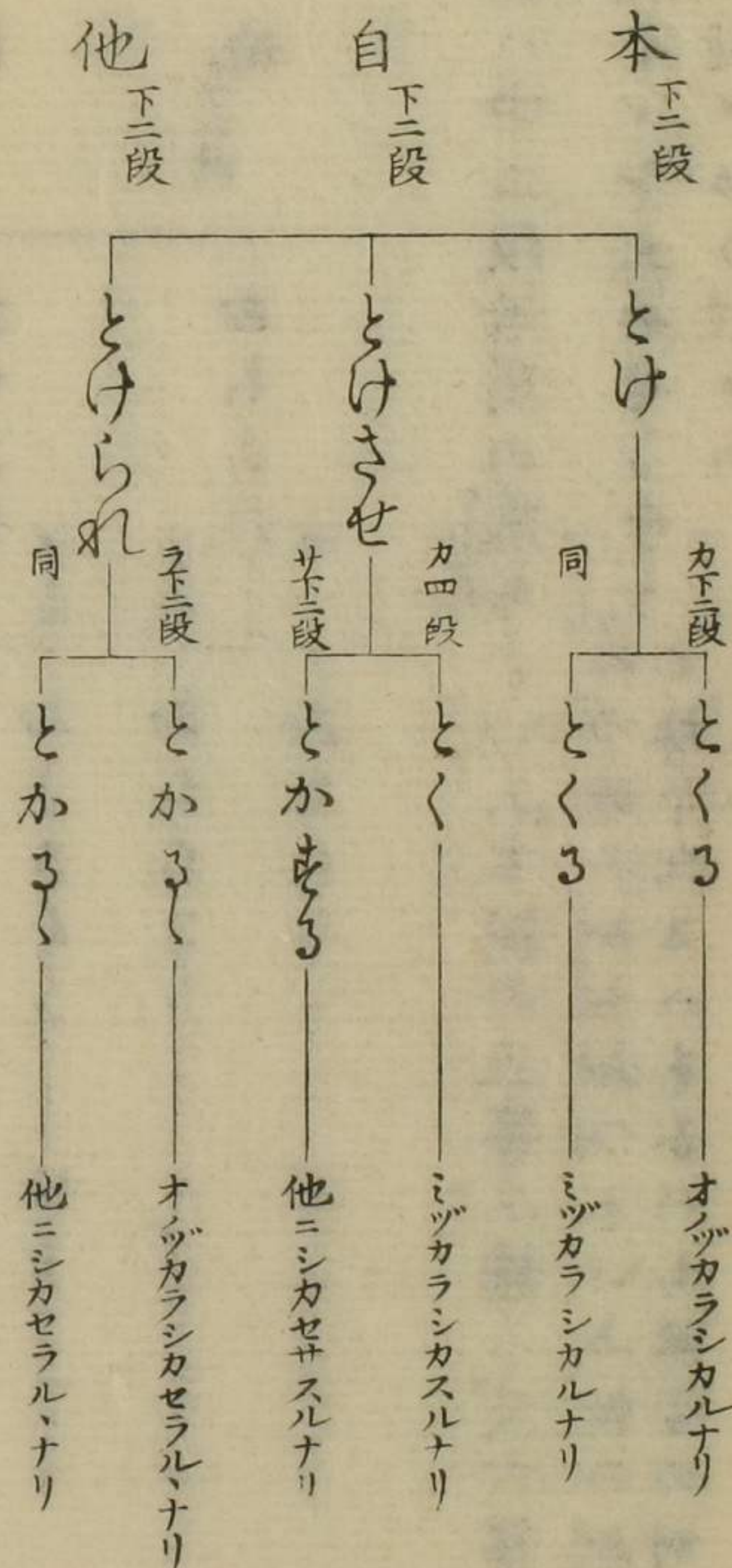


右ハ四段活用の飽くといふ本詞の三等不轉、又六等不別るを志めせるなり、









右ハ下二段活用の解けといふ本詞の三等小轉ト又六等小別を定めせるなり、大うこのこれらの例なきは此のほろハ皆準らるゝ知るへし、

又四段活用の習ハむ白ハむるどいふことばを佐行小移して習ハさむ習を白ハさむ白ハといふことあり、是ハ自シカふのこかゝる詞なり、

遺手枕のすきまの風もさむうり紀身ハならいの物も有ける  
 蓋ナふ人うきそぬぎうり 藤袴くる秋ごとふ野へをよほり  
 まゝ詞もふこころいけるふなどあり是らハ皆同格なり、  
 り、さてこのならいをならいせよほりをよほいせよほい  
 一をよほいせとい云ぬと之のよほをせよほせならいせ  
 などといふ時ハ自ふあらびて他は然せざる詞とあるなり、  
 遣梅のさくららの花ふよほをせく柳が枝よさあせてくが



源氏  
紅葉賀  
てほん  
あまをならいせなごりて云く  
これらの類なればよく味をひてさとするべし、

○辞ふ五階ある事

詞ふ五階あり、まづ作用言ハ、将然連用終止連體已然の五種  
あるを、隨て辞テニラハも五種の區別ある道理なり、さて形状言ふ至  
りてハ、六階なれを辞もまづ六種ふわめられど、大うさハ作  
用言ふおるべけれを、その五種の辞をよく心得るを、形状言  
の六種の辞ふも通をべし、

○一階の辞の俗解

葉ふ載せあるハ、むむむむの四種なれども、是ハ目標マシムシをあ

げたるもて、むむむと運用ハカきむハ、むむめと運らく類を  
よく心得べし、但し左の辞の上ふ○印を付したるハ、一種の  
の運用と知るべし、けの目標あり、○印のなきハ、おれト種類  
下これふ準ふなり、

○む ナイ ぬ ナイデアル 祢 ナイガマア

デアアルハチヤ同トイ  
づれも適宜なるべし、

む ナイデ むハ續くときハ、デの  
添てナイデと解はべし、

ト ウデアアルマイ  
ヤウデアアルマイ  
トハ、むの  
轉語なり、

で ナイデ でハむての省畧あり、  
此の辞古くハなり、

むらり ナカッタワイ むける ナカッタアル むけれ ナカッタガマア

ざり ナイデアリ ざる ナイデアアル ざれ ナイデアルガマア



ざりハ、ざあり  
の約言なり、

ざらむ ナイデアラウ

ざらむ

ナイデアラウデア

ざらめ

ナイデアラガマ

ざらむハ、ざあら

むの約言なり、

○む

ヤウ

む

ウデア  
ヤウデア

め

ウガマ  
ヤウガマ

まく

ウコト  
ヤウコト

まくハ、むの  
延言なり、

ま

ウデア  
マシヤウ

ま

ウデア  
マシヤウデア

ま

ウデア  
マシヤウガマ

の轉語なり、

○なむ

ウナラ  
ヤウナラヨイ

○む

ウナラ  
ヤウナラ

○ヨ

ヨ

此ヨハ一段、中二段、下二段等ニあり、四段ニハ五階ニあり、これハ希求使令の

よなり、故ニ片假字ニ  
きてこれを區別せり、

是らの類を、但しむなむの三ハ、ウ云々ヤウ云々と二様

小俗解を付したるハ、四段言のときハ、ウ云々なり、一段、中二

段、下二段言のときハ、ヤウドを加るヤウ云々と俗解を

例ふればなり、但し近古の俗ニヤウドあり、著む起む得む

得おく  
づし、

○二階の辞の俗解

葉小載たるハ、てつけりなむ一その六種あれども、これも目  
標をあげあるみをおの一種々ふふること一階の條の如



○ て テ

てむ テアラウ  
テヨカラウ

てむ テアラウデア  
テヨカラウデア

てめ テアラウガマ  
テヨカラウガマ

てま テアリマシヤウ

てま テアリマシヤウデア

てま テアリマシヤウガ  
マ

てむ テアラウナラ

てけり タワイ

てける タデア

てけれ タガマ

てま テアツタワイ

て テアツタデア

て テアツタガマ

て テシタリタイモ  
テヤワイ

此辞ハ願  
の意ナリ

て テシタリタイモ  
テヤワイ

是も願の  
意ナリ

此外にてハてもあるハ皆この分家の如くハ見  
ゆれども、てよマアといふ咏嘆の意のハもの添り  
るものよて、まことこの  
分家よも何らば、

たり テアリ

たる テアル

たれ テアルガマ

たりハてありの約言なり此の外ふたらばたらむ  
たらむなどの類ハ皆分家なれども、ごごしけれハ  
あげた上の例よな  
そらへてあつたし、

○ つ タワイ  
テシマウワイ

つ タデア  
テシマデア

つれ タガマ  
テシマウガマ

此のつつづれハ半過去の辞なり、さそてとつとハゆと  
一軒なれど、古くより分家して二軒とハなりたを、ま  
此の所の解をタワイとテシマウワイと二様ふ付た  
るハ、全略二様あるを志め、おくなり、テシマウワイ  
ハ全の解なり、タワイ  
ハ畧の解なり、

つ 何ッ  
何ッ

つ、ハつの連用言なり、たとへば  
見つ、ハ見ツ見ツと解をなすし、

つらむ タデアラウ

つらむ タデアラウデア

つらめ タデアラウガマ

つら タサウナ

つら タサウナデア

つら タサウナガマ



つべー タデアアルミイ つべき タデアアルミイ デアル つべけれ タデアアルミイ ガマア

此の外ふつもつやあどあるハ、例の咏嘆のマアカイの添りりたるよそごとの分家ふいあらざるごと、上の條小準へき、知るなし、

けり タワワイ けろ タデアアル テキタデアアル けれ タガマア テキタガマア

此のけりりるけきもつつるつれの如く全略の二様あり、タワイハ略のけりの解あり、テキタワイハ全のけりの解なり、

けむ タデアアラウ けむ タデアアラウ デアル けめ タデアアラウ ガマア

けらー タサウナ けらー タサウナ デアル けらー タサウナ ガマア

此のけむけらーの條も上のけりの如く解は全略の二様あり、けむハタデアアラウテキタデアアラウなり、けらーハタサウナテキタサウナなり、おしを知らるるなり、

なむ テイナウ なむ テイナウ デアル なめ テイナウ ガマア

此のなむハ俗よイナンのなむとも常のなむともいふ、

なまー テイミシヤウ なまー テイミシヤウ デアル なまー あ テイミシヤウ ガマア

なう、 テイナウ ナア

なうバ テイナウ ナラ

なぞ テイナウ ナイデ

ふけり タインダワイ ふけろ タインダ デアル ふけれ タインダ ガマア

此のふハ上のなと同意のふあり、

よけむ テイダデアアラウ よけむ テイダデアアラウ デアル よけめ テイダデアアラウ ガマア

よけらー テイダサウナ よけらー テイダサウナ デアル よけらー テイダサウナ ガマア



小きの次よ  
 小ーが  
 小ーが  
 又次下ある  
 の次よ  
 ーが  
 ーがな  
 と挙ぐべきを  
 此の口省けり  
 多く用ゑぬ辞  
 なれハありな  
 の俗さハ上の  
 條あるてーが  
 てーがハ  
 一て知るべー

小き ティンデアツタワイ  
 小ー ティンデアツタデアル  
 小ー ティンデアツタガマア

ぬ ティンダワイ  
 ぬる ティンダデアル  
 ぬれ ティンダガマア

此のぬも上のな  
 と同意のぬなり、  
 ぬー ティヌバイ  
 ぬべき ティヌバイデアル  
 ぬべけき ティヌバイガマア

ぬべらなり ティヌベキヤウマ  
 ぬべらなる ティヌベキヤウス  
 ぬべらなれ ティヌベキヤウス  
 ぬべらなれ ティヌベキヤウス  
 ぬべらなれ ティヌベキヤウス

ぬらむ ティヌデアラウ  
 ぬらむ ティヌデアラウ  
 ぬらむ ティヌデアラウ  
 ぬらむ ティヌデアラウ  
 ぬらむ ティヌデアラウ

ぬらー ティヌルサウナ  
 ぬらー ティヌルサウナ  
 ぬらー ティヌルサウナ  
 ぬらー ティヌルサウナ  
 ぬらー ティヌルサウナ

ね ティンデタモレ  
 ティンダガヨイ  
 此のねも上のな  
 と同意のねなり、

ー テアツタデアル  
 此のーハ次のきーの  
 と運らくーあり例よ  
 らバきを  
 をあぐべきなれども  
 ーを擧ぐるハ  
 ちとせしとの  
 區

別を早くあら  
 めむとてなむ、  
 此のきーの  
 の見やうハ其の  
 のめ今ハ其の  
 所ハ  
 きをさけ辞と知  
 る故に此の  
 ーを過去の  
 ーといふなり、

き テアツタ  
 ー テアツタデアル  
 ーの テアツタガマア  
 ーの テアツタガマア

此のそハ勿れの  
 なをまづひ  
 へ、何そと結ぶ  
 叫あひ  
 のそなり此そハ  
 俗ハナニソの  
 そといふなり、  
 ぞと濁  
 ること  
 あり、

〇 そ コトナカレ  
 △ らむ ルデアラウ  
 らむ ルデアラウデアル  
 らめ ルデアラウガマア

△ ベー ルベイ  
 べき ルベイデアル  
 べけれ ルベイガマア

△ と ルト

是らの類なり、  
 〇△の印を付したるらむ  
 べーとの



三種ハ、ソゾも古格よそ、一段活用の二階ふのもあるテラハ辞ふ  
りと知るテラハ。

○三階の辞の俗解

葉小載たるハ、らむべーめりまどなりをうりテラハのふハタとヨ  
ヤナなモカシテラハの十五種あれども、是も目標をあげテラハよそ、  
おのゝ種々ふ分テラハこと、一階、二階の條のごとく。

○らむ

ダラウ

らむ

デアルダラウ

らめ

ダラウガマア

らー

サウナ

らー

サウナデアル

らー

らーサウナガマア  
らーサウナガマア

○べー

バイ

べき

バイデアル

べけれ

バイガマア

べーハ昔も今も同ト詞なり、  
物語などよべいと有も同意。

べうらび

ベクナイ

べのらぬ

ベクナイデアル

べのらね

ベクナイガマア

べのらば

ベクラウナラ

べのらり

ベクアルロイ

べのらる

ベクアルデアル

べのなれ

ベクアルガマア

べのりり

ベクアツタフイ

べのりける

ベクアツタデアル

べのりなれ

ベクアツタガマア

べのらむ

ベクアラウ

べのらむ

ベクアルダラウ

べのらめ

ベクラウガマア

べのらー

ベクアルサウナ

べのらー

ベクアルサウナデアル

べのらー

ベクアルサウナガマア

べらあり

ベキサマナリ

べらある

ベキサマデアル

べらなれ

ベキサマデアルガマア

ベミ

ベキヤウスサニ

ベク

ベク

○めり

トミエルワイ

めり

トミエルデアル

めれ

トミエルガマア



めりハ推察の意なり、

○まどー マイ

まどき マイデアル

まどけれ マイガマア

まどく マジク

○なり ワイ

ふる デアル

なれ デアルガマア

此のなりハ俗ハワイナリといふ咏嘆のなより此の添ハリをなりたるなれと運らけるより、四階のなりハ異なり、四階のなりハありのつゞまりより別なり、此の所のなりハ多々へバ古今ハ難波なるなみらの橋もつくるなり、今ハ我が身をなまふ、ぬとへむ、又みよ野の山のあら雪つゆらふと寒くなりまきさるなり、又秋風ふもつうりあひぞ聞ゆありたが玉づさをあけまきつらむ、後撰ハ曉のうひの音らぞ聞ゆあれこれを入あひとおもハヤ、

○むのり トスルダケ

此のむのりハ物を計るなり、元ハ清きてよみよをむのり詞の濁りて辞とあれるなり、終止言を受る故ハトもドを添へて解まる例あり、

○のよ トセトスルダケ

此ののよハ兼てある意なり、また設なり、これも終止言を受る故ハトもドを添へて解まる例あり、

○ハタ マア

此のハタハ咏嘆辞にて、四階のむと異なり、とハ切れよるを續ぐ辞なり、

○と ト

ちふ トイフ

ちふもてふ も同意なり、

○てふ トイフ

な ナカレ  
なハ勿もて禁止の辞なり、



○カシ サ カシハ切れよ詞小添ていふ咏嘆辞なり

○ヨ ヨウ ヨハ咏嘆辞なり

○ヤ カイ ヤハ咏嘆辞あり又疑歎のヤといふ此の外ヨと解をべきヤありこゝ小略し

○ナ ナア ナハ咏嘆辞なり

○モ マア モハ咏嘆辞なり

是らの類なり、さて此の所のハタヨヤナモカシの六種を片假字よて記したるは、咏嘆の辞のあつたり希求使令のよ、禁止のな、指詞のやも、不混ぜざら止めむため小片假字もあつたりたるあり、見む人志あ心得てよ、

○四階の辞の俗解并ニあふさへはららの事

葉ふ載たるは、あなふありをとむありあよはこの八種をれども、是も目標を擧たるよて、おのゝ種々ふ分れたること前階の條の如し、

○あな ギヤナアコトギヤナア

此のあなはいあなのかゝの轉じて咏嘆を含める辞とされたり、故小體言を受るときはハヂヤナア用言を受るときはハコトギヤナアと解する例なり、

○小 デニ

此の小ハ場所をさし辞よて、處ふよをてハテと解する例なり、又副詞の小ハ別小意なり、此四階のよと混ぶることある

○なり ニヂヤアリノヂヤアリ ナリニヂヤアルニヂヤアル ナレニテアルガマニテアルガマ







此の「も」ハ漢字の將「ふ」あれり故「三階の「も」ことハ異「も」其の意ハ俗の「マ」「マ」「タ」なり本居翁「モ」「マ」「タ」と解したるも大略おろし意あり散木集「ちぬの海浪ふただふふうきささるのうきを見るも」ゆ「し」みけり」とある是らの「も」をり、

より ヨリマア

まで マデ

のゝ バカリ

ゆゑ ユエ

から ユリエ

もの モノ

ものを モノヲヨ

漢字の自「ふ」あれり○「より」以下「なべ」「ふ」至るまでハ「葉」ハ載せざる辞なり、

漢字の「迄」ハ「あ」れり漢字の「而」ハ「ふ」あ「る」きり

ものから モノナガラ

ものならなくふ モノデナイノニ

だふ デモ

さへ マデ

をら ソレ

ごと ゴトシ

なべ ナラビニ

なべふ ナラビニ

是らの類あり、

此の所の末尾「ふ」舉たる數種の中「ふ」ハ「よ」を添へ「う」ら



よさへおすらよあどもいへり、但し是ハ副詞のよあり、  
又あふさへすらのことよ付てハ、故人の説ハきりぐあれど  
も、未どしきやうなれば、一しより左よいふべし、

あふのよハ四階の辞のふをのよハあらば、だよといふ一  
つの辞あり、まゝ一種をあよといふあり、をの下ふあり、だふ  
あり、俗ふソレデモと解まるなり、まゝあよもと下ふもを添  
ていふときハ、俗解デモマアなり、まゝだよハ俗ふデモと  
いふおれど、

さへハ俗解マデあり、下二段のそへの義なり、まゝそへハソ  
ハセよそ物を副へるこれまゝもとちあらを入るし意を

もあり、本居翁がそひありといへるハ近けれども、四段言ふ  
れを自他あうひてまゝ、土佐日記ふあもめさへマデデモあふ浪と  
みゆらむとあり、是らを味をふ履し、

すらハ万葉ふ直の字まゝ、尚の字をあてあり、故ふなほの意  
といふ説もあり、玉霰タマアツよふまゝらハやまう猶といふ意ふあ  
しといへり、真頼考ふまゝらハ俗のソレといふ意なり、今も  
國ふよりマハソラまどいふ所あり、万葉ふ尚の字を當てた  
るハ、尚ホホハ直スラの意ある、故ふ假借せる文字あれば、泥むべあら  
ば、古歌よ「とけてまらぬるほどもあき云々、家人のちる雨を  
らをまらうひふまら、君まらもまことの道よ入ぬあり、」など







足らざるなり、さそそのの何とハ軽重あること小心つあ  
びして、變格といふりのをたてていとあやしく論らひたり、  
故小今ハ初學もさとり易らむため小<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>とが<sub>レ</sub>を加へま  
ゝが<sub>レ</sub>の何<sub>レ</sub>の三ツ小<sub>レ</sub>輕と重<sub>レ</sub>と輕の重とあることをさし示せ  
り、  
又玉緒小<sub>レ</sub>ハ何<sub>レ</sub>の部類小<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>うたれ<sub>レ</sub>のい<sub>レ</sub>で<sub>レ</sub>ある<sub>レ</sub>どの類を舉  
げられど、是らハ何<sub>レ</sub>の部類小<sub>レ</sub>あら<sub>レ</sub>び<sub>レ</sub>そ<sub>レ</sub>の部類あり、因  
りて今あらためて、**も**の**伎**が**の**ど**や**の**何**こそ<sub>レ</sub>の五條と  
ハを<sub>レ</sub>つ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>ほ<sub>レ</sub>くり<sub>レ</sub>は其條々小<sub>レ</sub>於てい<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>し、

○も<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>伎<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>指<sub>レ</sub>辞<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>事

**も**の**伎**ハ輕き指辞なり、そは伎<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>自然小<sub>レ</sub>切<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>詞<sub>レ</sub>か  
れを、**も**の<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>指<sub>レ</sub>辞<sub>レ</sub>ある<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>於て<sub>レ</sub>ハ、勿論のことなり、**も**の<sub>レ</sub>ハ  
終止言の結びよて、**も**ハ體より受<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>ハ、指<sub>レ</sub>辞<sub>レ</sub>あり、咏  
嘆辞をもありて、一様あら<sub>レ</sub>び、**も**の<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>よて見<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>し、  
人を花を月も雪も<sub>レ</sub>の類<sub>レ</sub>ハ、おろく<sub>レ</sub>ハ指<sub>レ</sub>辞<sub>レ</sub>あり、  
五た<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>え<sub>レ</sub>そ<sub>レ</sub>が<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>な<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>ゆ<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>あ、  
轉<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>兒<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ち<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>島<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>き<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>れ、  
麓<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>かり<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>め<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>き<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>君<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>な<sub>レ</sub>き、  
古<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>諾<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>つ<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>ご<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>ぬ<sub>レ</sub>め<sub>レ</sub>り、い<sub>レ</sub>づ<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>秋<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>な<sub>レ</sub>ぐ<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>夜<sub>レ</sub>ハ  
是<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>咏<sub>レ</sub>嘆<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>なり、







ハ其のちからありて下へかゝるもまゝつゝ故ふたりのあ  
る指辞といふべし。

古今人ハいさ心もあらぬ故郷ハ花ぞむすのうふにけひけり  
同春うききたててやいつこゝ野の吉野の山ハ雪はあつ  
同ときなる松のこもりも春くれハ今ひさしほの色まありきり  
是らの類をいふ左の畧を見てりきまふべし

指 含蓄 春ハ来ふけり 冬ハスギタガ春ハ来タワイ  
春もくれゆ 花モ散タガ春モクレユク

辞 疊用 冬ハまぎ春ハ来ふけり 冬ハスギテ春ハキタワイ  
花もちり春もくれゆ 花モ散テ春モクレユク

咏 疊用 見てハゆきまきてハゆく 見テテユキキ、テテユク  
見てもおもひまきておもひ 見テテ思ヒキ、テテ思フ

嘆 單用 見てハ、ゆく 見テマアユク  
きてもおもひ 聞テマア思フ

のハ玉の緒ハほどと同トほど指辞して、ももの結びよそ  
切れよハ變格ありとあれど、こはの小軽重ある哉知られ  
ぬのらのことあり左の歌どもを見てささるる也

古今 待人ふあらぬものあら初雁のりきたるこゝのめづらしき哉

六 千載 玉泣きよ涙のこゝる心ちをあらく空ハ雁のなくあり

是らのハ軽く指して、うろく結べるなり、ゆゑハ軽のの  
いふ重のの、事ハ次ふいふ也

因ふ云ふのハ軽重ともの體言をのこ受て、用言をうくる  
ことあり、用言を受くるがあらば、その用言ハいひを  
る體言となりしものとして知る也、ちりき世の人ハ歌







是らの類をいふあり、さて此の見るが<sup>い</sup>び<sup>い</sup>さ<sup>う</sup>つらふ<sup>あ</sup>  
う<sup>さ</sup>といふべきを見ら<sup>い</sup>び<sup>い</sup>さ<sup>う</sup>つらふ<sup>あ</sup>う<sup>さ</sup>とやう  
よ<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>違格なり、用み<sup>ら</sup>る<sup>ら</sup>ば又見ら<sup>い</sup>び<sup>い</sup>さ<sup>う</sup>つ  
らふ<sup>あ</sup>う<sup>さ</sup>い<sup>び</sup>さ<sup>う</sup>つらふ<sup>あ</sup>う<sup>さ</sup>とやうの指辞の  
下<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>け<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>け<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>とて結ぶ格なりと知るべし、

○ぞやののれ指辞の事

ぞやののれハソレの意なり、もとおれ<sup>い</sup>性質よて、他をさ  
し置て、一方をさ<sup>い</sup>辞あれど、も<sup>い</sup>よりハ重くさ<sup>い</sup>辞なり、やハ  
柔ら<sup>い</sup>なる性質なり、大ら<sup>い</sup>の疑ふ意を志め<sup>い</sup>辞<sup>い</sup>て、あ  
よりハ<sup>い</sup>緩<sup>い</sup>なり、の<sup>い</sup>ハ堅き性質あり、疑の辞あれどもや<sup>い</sup>ハ比較

きハ、迫りて疑ふ意あり、の<sup>い</sup>ハ柔ら<sup>い</sup>のよて穩や<sup>い</sup>なる辞なれ  
バ、別<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>たりたて、い<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>へ<sup>い</sup>ぎ<sup>い</sup>ほ<sup>い</sup>どの意なり、

あ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ハ花ぞ<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>くなる、春ぞ<sup>い</sup>立<sup>い</sup>けるといふ<sup>い</sup>ハ、花ガソレサイ  
タデア<sup>い</sup>ル、春ガソレタツタデア<sup>い</sup>ルといふ<sup>い</sup>ことなり、花や<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>  
らむ、春や<sup>い</sup>たつらむといふ<sup>い</sup>ハ、花ガ大カタサクデア<sup>い</sup>ラウ、  
春ガ大カタツデア<sup>い</sup>ラウと、いふ<sup>い</sup>ことなり、花あ<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>くら  
む、春あ<sup>い</sup>たつらむといふ<sup>い</sup>ハ、花ガ十<sup>い</sup>九<sup>い</sup>つサクデア<sup>い</sup>ラウ、  
春ガ十<sup>い</sup>九<sup>い</sup>ツタツデア<sup>い</sup>ラウと、いふ<sup>い</sup>ことあり、花の<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>  
なる、春の<sup>い</sup>たつらむといふ<sup>い</sup>ハ、花ガサクデア<sup>い</sup>ル、春ガタツデア  
ルの<sup>い</sup>是<sup>い</sup>ハ重<sup>い</sup>の<sup>い</sup>といふ<sup>い</sup>ことなり、此の例をも<sup>い</sup>よろ<sup>い</sup>づ<sup>い</sup>を味<sup>い</sup>をひ



知るべし、

<sup>十一</sup>吉今 ひとりの物をあつて秋の田にふるものをよといふ人のかき  
<sup>千載</sup>宮城野の萩やをーあつて花さびしう聲のいろを  
これらハ、玉緒三轉證歌の條小舉げし歌よて重ののなるを、

○何の重の指辞の事

何ハゆとり軽重なき辞なれども、梨の圖小軽重と二様小  
あげたるものと同様よてゆく辞テラの軽重よりて、區別を  
あらはするなり、さて何ハ疑の意を示し詞なれば、體言とて  
も然るべきやうなれども、先達セツこれを指辞とせし、志あり心得  
てさう上げぬきのをならぬ、益あれば志ありあべし、その疑

の輕重は結辞の輕重小志さあふゆのなり、その輕のわこハ  
次なるが何の條小示すべけれ、此の所ハ重の例をのこ  
あめ、

<sup>十一</sup>吉今 瀧つせの中ふもよといありてふをさど我戀のふあせとをさ  
<sup>六帖</sup>吉今 みるまの浦のをゆふいこさね我を君があひひる  
是らの類をいふあり、證歌ハゆと多くあれど省まら、

○こそその指辞の事

こそハぞを一層はよくいふゆゑ小、コソと迫るなり、かく迫  
るゆゑ、此の結びハ却りて後弱くして、咏嘆の意あり、故小  
已然言をりて結ぶ例なり、これ迫るハあへりてゆるまふ應



むさ理あり、

古今 宮城野のわあらのこころを露をおのり風をまろごと君をこそすて

天智記 ぬの色ぬのあめ鮎こそい鳥へも色き云々

是らの類をいふなるを證歌いいと多うれど省まら、

○が何れ軽の事

が何れも軽重あれど軽きものとおれどほどの指辞あり、

後撰 秋の田れいねてふことをうらふ思ひ出るがうれけもあ

六帖世の人れいとけるものを我為よといとぬいたれがうきなる

五箇日のくれふうをひの山をこもる日いせあのが袖もさやよふら

後撰 戀も思ひこめつあはるもの残人ふ志くさるるあはなかり

見ゆやくと待つ夕ぐれと今いとてうらふあはなとづれまされり

新勅 高砂のをめれきさらたがぬれをみやあやまきつく霞をぬ

金葉 淡路のまうらふ千鳥のるるこゑふい夜ねさめぬまのせきり

是らハ皆がの軽き格何の軽き格なり此の類をばあれど省

まら、

○が何れ重の事

がの重がの重の結びハ玉緒の三の巻も見色しと、

古今 けりら小夏いんまひさの葉れさやく霜夜をさかひとらぬ

十九 万二さく波のちがさくれなるまきくふつねと君がおりやせりける



拾遺 一 引おやど梅の立枝やみえうらむおもひのちあふ君のきまよせり  
なごの類あり、

○徒の重れ事

徒の重徒の重の結びハ、玉緒小變格として擧げしる中ふおほ  
あり、

後撰 十六 數あらぬ身をおも荷よそり野山高きなげきをおひひらぬ  
拾遺 十五 引はあつつくまの神れつりくと我身ひらふ戀をつまはる  
なごの類なるその餘もあざうくく知るべし輕の結びハ上  
ふいへり、

○希求使令小係るもの徒れ事

又希求使令小係るはもの徒をはもの徒の重といふハ、葉の圖小  
擧しるが如し、その下二段加行變格、佐行變格の一の音ずし  
四段、奈行變格、良行四段一格の五れ音あり、されをまぐてふ  
ハ、さくらばさて重のもの徒と名付し、ハ、まの結ぶ辞の重  
きみよとて名づけしるよて、上のかの何をどの例の如し、  
古今 十六 深草の野べのさくらし心あらばこくばうり、墨をぬふさけ  
万十 朝をくわが見し柳うらひまの来ぬなくべき森まをなれ  
なごの類なり、

因小云ふ、指辞ハまぐて上小いへり如く五條よて、その辞  
ハ五十音の上と下との兩端の音れうちり取り用ぬ



あり、五の音とをいふなり、其の證ハたものたハ一の音  
なり、もハ五の音なり、がののハ一の音あり、のハ五の音  
あり、ぞや、れぞハ五の音なり、やハ一の音なり、あハ一の  
音あり、ま、こ、そハ五の音あり、さて此の兩端ハ詞の首尾  
あて、これを材木ふくくハ端をきりて杭<sup>を</sup>用ゐるがご  
と、然れば言語ハ於ても指辞ハ言葉の杭<sup>を</sup>あり、此のくさ  
びあるが故ハ言語動あだたより、あらむ、これよく杭  
を用ゐれば家のうごこのぬおれ、

○變格といふ事

變格といハ、本居宣長翁が私ハ名付する名あり、其の譯ハ翁ハ

年来考へられて、指辞ハも徒、どのや何こそと三條ふさごめ  
てよをは紐鏡を著し、ま、其の證歌を擧げ、辞の玉れ緒  
を著をされ、ハ、實ハ未曾有の卓見あり、さてその中ハ右  
の三條ふさごめ、ぬものどを出来よ、れ、そハ玉の緒の二卷  
よあげたふ、  
後撰 一 ふる雪れ、のちろ衣うちきつ、春まふなりとおどろくれぬ、  
是數あらぬ身をおも荷よ、よ、の山高きあけきを思ひ、ぬ、  
以下略、これらハ皆徒の重の結びあり、さて、何の輕の  
結びある、

後撰 十一 戀、も思ひ、あつ、あ、ものを人ハあら、た、た、た、ふあり



思ひ出ておぼろぎしける山彦のこゝろふこりぬこころなるふあり  
 二金葉夏ノよれ月まろつやどの手すまびよ岩ゆる志づいぐむらびの  
堀川百首逢見ての何しよの戀よさらがれば待し月日もあふならぬうか  
 是らの類をまべて變格とて特別とありしより然れども別  
 格の意よて違格とてしたるふいあらばかくさざめられしこ  
 とハ上よもいへるごとく輕重の二格あるを見出さばしそ  
 偏小三條とのとおもひ定められしお故ありおのきぢ指  
 辭を五と改めたる旨意をよくあおもひあを變格といふ  
 ものハ無きものをなりと自あらさそをぬぢなほしけし  
 ハ玉の緒變格辨ふあげたれば就て見るべし

○敬語添詞の事

凡言葉づらひの中ハ敬語といふものあり又添詞といふもの  
 のあり敬語といふ見給ふ聞給ふの類よてこれをあれもよく  
 志れることなり此の外ハいざ一種敬語ありこれハ別よし此の他ハ波行下二  
 段の給へよて思ふ給ふるの類あり思ふ給ふるハ正しくハ  
いざれど中昔より轉下てかくもいふことなれりこの給へハ給ハせの約なりされ  
 を思ふ給ふるハ思ひ給ハせるの約なりこれ奉存フンソウといふ俗  
 言の意はおれども然れども奉存ハ此方コナタよりおのひしをまう  
 るなり思ひ給ふるハ上のめぐりあておろろある身もかく  
 思ひよまハまるといふ意よて自他ハあぢへど敬むる意ふ



至りてハ、おれ、あむきなりと知るべし、此の他四段活用  
よてハ、あむおさむうたむといふ一の音より、佐行下二段  
のせへうつゝ、あせ給ふおさせ給ふうたせ給ふといひ  
く敬語となり、一段中二段下二段活用ハ、さ文字を加へて、著  
させ給ふ見させ給ふ起させ給ふ落させ給ふ得させ給ふ受  
させ給ふとやりふいひく敬語とあるを、まゝ三變格よ至  
りてもおれ、ことあり、さてその加行變格、佐行變格、奈行變  
格、良行四段一格ハ、四段の質、否を試むふハ、判然ハツキリと分る  
法あり、そハ如何といふハ、加行變格ハ、来させといひて来せ  
といひ、佐行變格も為させといひて為せといひ、良行四段

まぶ四段の性質ナチハ、非るあり、四段の性質ハ、飽あせ押させ打  
くが故なり、されバ直小せたせとやりふ直よせゆへつへつ、あざ  
るハ四段性質ハ、あうぎるゆのと知るし、奈行變格ハ、往た  
せ死ふせといひて、往ふさせ死ふさせといひ、良行四段  
一格も、有らせ居らせといひく、有らせ居らせといひ、  
びふられ、此の二行ハ四段の性質あり、但しこれハ因ふお  
どろり、おくろ、  
添詞といふハ、あきくもるうちくとりあふさくをへて  
ふりもへくたちあざむくれなどのあきうちどりさくふり  
たちの類あり、是らの詞をそめれば、その意強くもなり、まづ  
軽くもあるなり、さて上の敬語の、給ふ思ふ給ふるの類と添



詞とハ連用言なれども常例の如くて<sup>レ</sup>り<sup>ヲ</sup>を添て見<sup>ル</sup>格小  
何ら<sup>レ</sup>びて<sup>レ</sup>り<sup>ヲ</sup>を添てハ聞正ぬあり見給ふを見て給ふうち  
とハ解を<sup>レ</sup>る<sup>ヲ</sup>て<sup>レ</sup>り<sup>ヲ</sup>を添て解すべきハ通常の連用言なり  
らざる類なり

詞乃禁打聽終

明治十九年十月廿日

上野なる酌松亭にて

語學會能竟宴あけの時

よ免海

なほ能ある

く来こそあらは

つ矢とせらる

おけー個か

そやーものしと

あ



明治二十三年八月廿三日印刷  
同年同月廿八日出版

定價參拾錢



著者兼印  
刷發行者

東京府士族

鈴木弘恭



中外堂

小石川區竹早町十三番地

柳河梅次郎

日本橋區本町三丁目十番地

中西屋

小柳津邦太

神田區表神保町二番地

書肆

回文堂

岩本三二

芝區芝口三丁目十番地



